

状態「土地と其利用」「農業」「工業」「交通機關」を詳説せり。内容より云はゞ寧ろ「東京市の西郊」と題すべき書なり。臺地なる西郊に對して低地たる東郊の研究は興味ある對照にして、將來著者の著手待たんとす。此種の研究は本邦にては未開拓に屬せしを遂にかゝる纏りたる研究を發表せる著者の勞苦は吾人の深く敬服する所なり。著者自撮の寫眞とスケッチは印刷の鮮明なるに相俟て本書の光彩を添へたり。猶望蜀ながら大体に於いて晦澁の氣味あり之を讀むに甚だ困難を感ずるは餘りに普通地理書の形式に囚はれて境域、地形、水素、地質など、綱目を立てたる爲なるべし、殊に其研究法が現代の水平的差異に重きを置きて工業區、住宅區、蔬菜栽培區、盆栽植木栽培區(著者は此名を用ひざれど)農業區など、分けて其現狀を繰述するに偏し、僅かに古老の語位に其變遷を十年乃至二十年已往に止めたるは如何、都市と共に急激に變りゆく郊外地區の研究には歴史的の研究法を適用すべきには非るか。著者は「参考すべき良書もない」といへども、シュリユーター氏は *Geographische Zeitschrift* に數回斯學の研究法を講じ、又單行本として東北チューリンゲンの研究を出せり。フォーセット氏が一昨年の *Scottish Geographical Magazine* にエディールと云ふベンニン山脉中の一溪谷を例として出したる論文も參考の價值あり。是等は何れも歴史的の研究法に依れるものにして

著者の一讀を煩はさんとする。(大倉出版部發行價□□□)〔下田〕

●英文 ミクロネシアの土俗調査 一冊 松村啓著

東京帝國大學人類學教室の著者が大正四年我が占領地たる南洋諸島に調査の爲め出張せられし折の結果を、東京帝國大學理科大學紀要の一として出版せられしものに係り、原題を *Contribution to the Ethnography of Micronesia* と云ふ、鮮明なる玻璃版の圖版三十三葉、石版色刷二頁大のもの一葉なり、東西兩カトリン群島土人の各種土俗に關し、其の觀察調査する所を記述せる明快なる敘述は其の圖版の豊富と相俟ちて頗る要領を竭したるを見る。蓋しミクロネシア土俗研究上に對する一大寄與なる可し。(東京帝國大學理科大學發行、價六二〇)

●佛文 千島アイヌ 一冊 島居龍雄著

是れ亦東京帝國大學理科大學紀要の一にして、往年著者が北千島を調査せられし處を基礎とし、其後に於ける研究の結果を集め遂に此の彪然たる *Les Ainou des Iles Kouriles* の一冊をなす。玻璃版及石版色刷の圖版三十八葉を收め、千島アイヌの體質、言語土俗、傳説等より彼等の石器時代に關する詳細なる記述を試み、著者の該博なる智識を披瀝したり。就中アイヌ語とアシリヤ語の類似を挙げ、スメル人、カルテヤ人とアイヌクシ人との關係を想像し、クシ(越)は *Kassites* と相似るを説き、アイヌが東移の以前

西亞地方に於いてカルチャ地方の人種と接近して居住せるものなるを説けるが如きは、アイヌが高加索人にして或はProto-Indiansと共同起源を有すとなす所説に一步を進め、ラクーヘリー氏、ホール氏等の見解の新装とも見る可し。此の興味ある大膽なる假説が日本人たる著者によりて唱道せられたるは、吾人の最も注意せんと欲する所にして、時機を得て吾人の之に關する態度を明にする所ある可し。要するに近時に於ける日本人種學考古學上の一大著と稱するは誰人も首肯する所ならむ。(東京帝國大學理科大學發行 價七、八〇)(以上濱田)

●熊本縣史蹟調查報告 第一回 熊本縣調查會編

熊本縣の史蹟調査保存の事業は一昨年初已來同縣教育會に屬し着々歩を進め、昨年末に至り其の第一回の調査報告を出せり。此の書菊版百五十餘頁、附圖三十一枚より成り、十數名の委員が大正六年九月より全七年三月に亙る期間に於て調査せる貝塚、古墳、城址、神社、佛閣、老樹、古文書、繪畫、佛像等の各方面に亙る記事を載せ、特殊の遺跡例へば阿高貝塚 江田の古墳等に就いては専門家の報告を掲げたり。其の包括せる代は上は石器時代より下は徳川時代に及び、遺蹟の種類またあらゆる方面に亙りて、從來此の種の報告の多く一方に偏せるに反したるは、史蹟調査の主らず。こゝに論ぜんとする肖像畫は自然に對する觀察精緻さな

意より見て最も採るべき点と云ふべく、本書の内容また阿高貝塚の如き、八代中宮祠の寶篋院塔の如き、天草南蠻寺址の如き興味あるもの少なからず。印刷圖版共に鮮明なるも喜ぶべく、近時同様主意の書の續々出版せらるゝに際し參考に資する所少からざるべし(熊本縣教育會發行 非賣品)(梅原)

●雜誌

●足利時代と肖像畫 文學博士 原 勝郎
(國華三三三、——四號所載)

日本文明は王朝と徳川の兩時代に於てのみ進歩を成就したるにあらずして、亂離の極の如く見做さるゝ足利時代に於ても當時の人には後人の思惟する如く不安の念を與へず、時代の特長なる文明は休止することなく發達を續けたり。足利時代は永享の末までを以て登り坂とし、嘉吉の義教將軍の弒逆を一轉として下り坂に就きたるものと見るべく。其初期に於ては已に經濟上の發達あり、餘裕ある生活と共に因襲は其勢力を失ひつゝありとなり。義教將軍は醜薄の名ありと雖織田信長以前已に山門の燒打を命じたる如きを見ても新時代の魁をなす素質ある頃政治家たりしやも知るべからず。時代は下層民の頭を扛げ來ると共に個人主義が漸く地歩を占め來る時代なり。これ肖像畫の發達を遂ぐる時代なり。佛畫より轉化したる人物畫はこゝに肖像畫として論すべきに